

差別の構造と国民国家

シリーズ宗教と差別 第1巻

本書は「宗教と差別」に、現代の世界と日本の事例が考察されている。という4巻からなるシリーズの第1巻である。巻評者(島園)には題名だ

末を見ると第2巻、第3巻と「零巻」の案内があり、刊行が待たれる。第1巻以外の3巻は、第2巻「差別と宗教の日本史」、第3巻「差別の地域史」渡辺村からみた

「日本社会」、零巻「きよみず物語」被差別信仰

「差別」は、「巻頭言」から察するに、三人の監修者が主体となって二〇一五年に始められた共同研究プロジェクトに由来する

「公共圏」「統治」「聖なるもの」によって示されている。ここではキーワードは、「主権」「公共圏」「統治」「聖なるもの」で、ミシェル・フーコー、ジョルジュ・アガベン、ユルゲン・ハーバーマス、チャールズ・テイラー、タルズ・アサドらの理論を援用し

つ、「人民」が「主権」者であるはずの国民国家においてなぜ差別が生じるのか、そしてその際どのように「聖なるもの」が関与するののかについて考察している。

第一章からさわりと思

介しながら強化している

「この主権と統治の両局面によって創出され、維持される境界線内部の領域の存在の感覚、すなわち個人が帰属する、しかしながら日本列島における差別の発生と深化の構造」と川村寛文「情動的存在と「モノ」の政治」では、舟橋健太がインドのカースト制度と国民意識の関わりについて論

史を概観した上でシオニズムとイスラエル国家が「ユダヤ人」のアイデンティティに及ぼした変容の意味を問うている。またムスリムとして養育された過去をもつ人類学者のタラル・アサドが、フランスの学校でのイスラム教徒のヴェール着用問題への「解決」について批判的に論じた論文が如田によって訳出され、寺戸淳子が現代カトリック教徒らが創出した障害者と共生する「ラルシュ」共同本昭宏が福島第一原発事故後の避難者に対する差別を象徴天皇制と関係づ

けて考察している。第2部、第3部はそれぞれ興味深い差別の事例の分析で、多くは宗教との関わりが明確にあるものである。他方、近代以前からある差別が近代においてどのように再編されていったか、あるいは植民地や移民・難民のようになら近代において生み出されていったか、そこに近代国家の構造がどう関わっているかという共有された問題意識もある。そこで、差別に関する「聖なるもの」がどのような形で読み取れるかが問われる。全体として多様な事例を通して、近代国民国家における「排除」が、歴史的な奥行きをもつ宗教との関わりで見えてくるものを問う論集と言える。

終章は如田真司が「差別」を超えて」と題して論じているが、すべての人間を平等に遇するとい

う近代の理念とむしる近代国家がもたらしている差別の構造の双方を見上た上で、どのように差別を超えていくかが問われている。全体として「近代国家と宗教」に力点がある書物だが、さらにグローバル社会における差別、ジェンダーや格差がもたらす差別なども組み込んだ考察を望みたくなる。ともあれ、現代世界の差別の全体像を探りたいという欲望をそそぐ書物であり、その意味でも刺激的な好書である。(しまぞの・すすむ)

★上智大学特任教授・宗教学

現代の「差別の構造」を捉えるのに、「国民国家」「宗教」「公共性」という三つの主要概念が提示されている。これは差別の理論に深い共著者らが構築しようとしている理論枠組みが関わっているものようである。その理論枠組みについては、序章の大村一真・川村寛文「聖なるもの」と「統治」の系譜、第一部「差別の国民国家——理論的考察——」第一章の大村一真・如田真司「近代主権国家における排除と差別の論理——「公共圏」「統治」「聖なるもの」——」によって示されている。ここではキーワードは、「主権」「公共圏」「統治」「聖なるもの」で、ミシェル・フーコー、ジョルジュ・アガベン、ユルゲン・ハーバーマス、チャールズ・テイラー、タルズ・アサドらの理論を援用し

つ、「人民」が「主権」者であるはずの国民国家においてなぜ差別が生じるのか、そしてその際どのように「聖なるもの」が関与するののかについて考察している。第一章からさわりと思

介しながら強化している「この主権と統治の両局面によって創出され、維持される境界線内部の領域の存在の感覚、すなわち個人が帰属する、しかしながら日本列島における差別の発生と深化の構造」と川村寛文「情動的存在と「モノ」の政治」では、舟橋健太がインドのカースト制度と国民意識の関わりについて論

史を概観した上でシオニズムとイスラエル国家が「ユダヤ人」のアイデンティティに及ぼした変容の意味を問うている。またムスリムとして養育された過去をもつ人類学者のタラル・アサドが、フランスの学校でのイスラム教徒のヴェール着用問題への「解決」について批判的に論じた論文が如田によって訳出され、寺戸淳子が現代カトリック教徒らが創出した障害者と共生する「ラルシュ」共同本昭宏が福島第一原発事故後の避難者に対する差別を象徴天皇制と関係づ

けて考察している。第2部、第3部はそれぞれ興味深い差別の事例の分析で、多くは宗教との関わりが明確にあるものである。他方、近代以前からある差別が近代においてどのように再編されていったか、あるいは植民地や移民・難民のようになら近代において生み出されていったか、そこに近代国家の構造がどう関わっているかという共有された問題意識もある。そこで、差別に関する「聖なるもの」がどのような形で読み取れるかが問われる。全体として多様な事例を通して、近代国民国家における「排除」が、歴史的な奥行きをもつ宗教との関わりで見えてくるものを問う論集と言える。

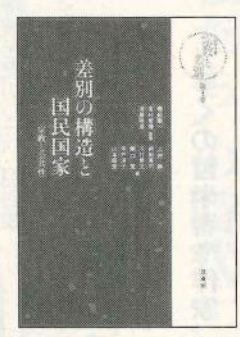
終章は如田真司が「差別」を超えて」と題して論じているが、すべての人間を平等に遇するとい

う近代の理念とむしる近代国家がもたらしている差別の構造の双方を見上た上で、どのように差別を超えていくかが問われている。全体として「近代国家と宗教」に力点がある書物だが、さらにグローバル社会における差別、ジェンダーや格差がもたらす差別なども組み込んだ考察を望みたくなる。ともあれ、現代世界の差別の全体像を探りたいという欲望をそそぐ書物であり、その意味でも刺激的な好書である。(しまぞの・すすむ)

★上智大学特任教授・宗教学

近代国民国家における「排除」と宗教

差別についての理論と、その事例を考察



四六判・340頁・3080円
法蔵館
978-4-8318-5721-7
TEL. 075-343-5656

島 園 進

皇制国家)の差別に至る過程を見ているのに対し、後者は現代のデジタルメディア社会において「イデオロギー」よりも情動の動員が差別を再生産していくものと捉え、過去の連続性を重視しないアプローチをとっている。第1部の論考はそれぞれ刺激的であるが、評者は宗教伝統を継承する聖なるものと国民国家のそれ、また国民国家以後のそれという理論課題が示唆されていると受け止

★いそまえ・じゅんいち 国際日本文化研究センター教授・宗教研究。
★よしむら・ともひろ 近代都市周縁社会史・博物館表象論。
★あさい・あけひこ 部落解放同盟大連連合会 浪速支部前支部長。

